シリーズ

西淀川記憶あつめ隊

2010年から細々と西淀川地域の方々のライフヒストリーを聞き書きしています。戦争を潜り抜けてきた方々の人生は、ドラマに満ち溢れており波乱万丈です。伺ったお話しの一部を紹介します。

2011年5月13日、8月5日聞き取り

和田　美頭子（みづこ）さん

◆鴻池組で電話交換手に

1927（昭和2）年に香川県で生まれました。大阪には1937年にやってきました。1940年から此花区の伝法北3丁目にあった鴻池組に給仕として働きました。鴻池組から日本橋の電話交換手養成研修に通い、電話交換手の資格をとりました。戦争の色合いが濃くなる中、お正月に友達と桃割れを結ってもらい阪急百貨店で写真撮影したそうです。1945年の大阪空襲で香川県の高松に疎開します。

◆結婚、西淀川へ

1948年に鴻池組の先輩で勉強をよく見てくれた重種さんが戦争から帰ってきます。美頭子さんを高松まで訪ねてきて、結婚という流れとなり、西淀川区の花川へ居を構える事となりました。現在もその場所にお住まいです。西淀川も戦争の空襲の被害がありましたが、花川の周辺は焼け残っていたそうです。当初の生活は水道が通っていたけれど、ガスはなくて薪で煮炊きをしました。洗濯はたらいです。西淀川は土地が低く、1950年のジェーン台風や、大雨の時に家の中に水が入るのが嫌だったそうです。

28歳頃、職場仲間と後列左から2番目が美頭子さん

◆オフィス街で牛乳配達

重種さんは日新化学に勤めていましたが、レッドパージで職を追われます。美頭子さんは自宅でせんべいを焼いて駄菓子屋さんに卸したり、歌島にあるグリコの工場でグリコやビスコを包んだりする期間工の仕事をして家計を支えます。日雇手帳を申請してハシケの仕事もしました。高所恐怖症の美頭子さんは怖い思いをしながら渡ったそうです。子供が学校から帰って来た時に迎えられるようにと朝早い仕事をしようと、1956～1970年まで北浜のオフィス街で牛乳配達をしました。20本入りのケースをもって階段を上って売り歩いたそうです。お得意さんから靴をプレゼントされたり、お客さんの趣味の会に呼んでもらったり、品があって働き者の美頭子さんは人気者でした。

38歳頃の美頭子さん。淀川土手にて

◆だまっていたらだめだと公害裁判へ

その後、姑の介護のため西淀川区で働くようになりますが、1973年ごろから痰が出始めて1977年に公害病の認定を受けます。当時は夜に顔をハンカチで拭くと黒く汚れたり、ワイシャツに汚れの首輪がついたくらい空気が汚かったそうです。美頭子さんは公害裁判の原告となりますが「だまっていたらだめだ」という気持ちを抱いて運動を続けてきました。

小学校を卒業してから、困難な中でも働き続ける美頭子さんの芯の強さに感動していると、美頭子さんは「人との出会いで人生が助けられたのよ」と教えてくれました。美頭子さんの話には沢山の人が出てきます。近所の方々や日雇手帳の申請を助言してくれた手配師、牛乳配達を紹介してくれた主婦連の人など、いろいろな場面で手を差し出してくれる人がいました。しなやかに生きながら、芯が強い美頭子さんのような人生の大先輩が西淀川にいる事がとても誇らしく思いました。

林